

# 第 12 回研究会より

参加者 11 人

会場：S 中学校図書室

大雪の先週とは変わり、本日は雨の日の開催でしたが、11 人という多くの参加者を迎えて、まる 1 年の本研究会を行うことができました。



今回は、11 月に、静岡県富士市立田子浦中学校の公開研究会に参加なされた保科先生から、報告をいただき、そのときの体育の授業をビデオで視聴し、その後佐藤学教授のお話のビデオを視聴しました。今回の授業ビデオは、体育（女子体育）ということもあり、体育の先生お二方も参加してくださりました。私自身、学びの共同体を実践している学校の体育の授業は初めて見ます。協同的学びの授業の実践では、一番多く見られるのが国語で、算数・数学も多いのですが、音楽や体育、美術・図工・・・などの授業を見る機会は本当にありません。ですから、この研究を実践するときに、技能教科の先生方がどのようなイメージで授業作りをなされるのか、私も技能教科の教師の端くれとして考えてきました。そういう意味で本当に、今回の授業ビデオは興味がありました。そして、一同、その課題の質の高さや、技能教科における協同的学びの授業のイメージを大いに参考にすることができました。本当に素晴らしい授業でした。できれば、多くの体育の教師に視聴して意見を交わしたかったと思いました。

## 1 体育の授業（女子柔道）



柔道着はみんな新しいもののようです、左肩に番号がかいてありますので、学校で貸し出ししているものなののでしょうか。

礼で始まって、礼で終わるといふ、柔道の大切なところを大切にしていることがわかります。どの生徒も姿勢が正しいです。



準備体操のサーキットトレーニングを 3~4 セットした後、受け身の個人ごとの練習です。畳をたたいて気持ちよいほど、大きな音を出しています。生徒たちも音の大きさを意識しているようです。授業者の Y 先生は、サーキットトレーニングから、「やりぬく」「きっちりやっぞ！」という声かけをしていました。単調な練習だったからでしょうか、でも生徒たちをみると、笑顔も出て決してモチベーションが低くありません。女子も柔道をこんなに楽しくできるんですね。



Y 先生の話をする度に、生徒の間から「集合！」の声がかかり、Y 先生のもとに駆け寄り、姿勢を正して座って話を聞きます。本当に聞くという姿勢に美しさすら感じます。

その後の授業展開は、寝技の課題が与えられました。ペアでひざを突いて片方が四つん這いになり、もう一方が、相手をどのように返すかという課題です。視聴覚機器の活用などを通して、ペアとペアの 4 人のグループでその課題を乗り越えていきます。課題はそのひとつ

ですが、どの生徒も夢中に取り組んでいきます。笑顔と拍手が本当に多くで、雰囲気  
の柔らかさを醸し出します。

Y先生が指導は、まずビデオで自分が男子生徒に行った模範事例を見せたこと。(生徒達は  
その模範を見て、その見事さに「お〜！」と感嘆の声を上げています)

“引き手”と“釣り手”について持ち方を指導したこと。

指導して、実際に生徒に活動させて、その様子を見てタイミングを見てビデオを何回も見せ  
て、さらに活動させてという指導を行っていきます。

課題がなかなか乗り越えられない生徒たちに、ヒントを与えました

「この技は柔道全体の共通していることだけど」

- ・ どの方向に倒すのか？
- ・ どのように倒すのか？
- ・ 逃げ道をふさぐには？
- ・ どんな方法でふさぐか？

全部、疑問形で、その後「さあやってみよう」答えを教えません。

最後は、4人グループの生徒たちが、デジカメやタブレット PC を持ち出して、互いのペア  
を撮影して、検討しました。

#### 【研究会参加者の議論から】

浅井さんからは、4人グループで進める体育の授業のアイデアに驚いたことが話され  
ました。2人ペアが活動している間、もう2人は観察者やアドバイザーとなって、他のペア  
の様子から学んでいること。“集合！”の掛け声は、授業者ではなく生徒たちで行ってい  
ること。(いつも並び方が決まっていて、教師に向かって先頭の列の右端の生徒が右手を上げ  
て集合をかけていました。)

高橋さんからは、教えない授業者の姿勢について話題が出されました。ヒントは出しても、  
答えは教えない。自分はよく、教えて出来るようにさせてから・・・と考えていたが、教え  
ないことで、子ども達が探求的に学んでいく体育の授業に感動したこと。

体育教師の阿部さんからは、視聴覚機器の効果的な活用について話題がだされました。デジ  
カメやタブレットを後半に生徒たちが利用していることに、羨ましいということ。保科さん  
からは、授業研究会の中で、校長先生がタブレットをもっと揃えますという話があったこと  
も紹介されました。

体育教師の笹さんからは、自分の実践との比較をしながら、話し合いだけでなく、活動  
量が減らないこと、体育では、できる子、できない子と能力差が表れて、どうしても能力ご  
とのグループになってしまいがちだが、本授業ではできる子もできない子もいっしょにな  
って学んでいた。それでもできるという授業に発想の転換を考えさせられたという話が出  
された。

園部さんからは、英語も体育と同じ活動量が大切な教科であること。協同的な授業のイメー

ジがなかなかできなかつたが、この授業をみて、すごくイメージをつけることができたことが話しに出されました。

笹原さんからは、途中浅井さんが、体育の授業は本来、このような生徒自らが課題を考えさせることを他の教科に先駆けて指導要領に組み込まれていたことを話されたことを受けて、本地区の体育の授業はどうか。技術を教え込む指導が強くなっていないかという話が出された。また、この授業やこの学校の雰囲気について、以前訪問したときも同様の感想を抱いたが、笑顔があり、自然と拍手がでる関係。女子の人間関係も良好のようなことなどを感じたこと、校長のリーダーシップの大切さが話されました。

## 2 佐藤学先生の講演

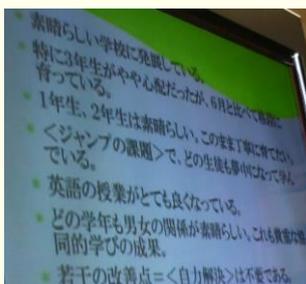


### 体育の授業からの驚き

- ・ 女子が柔道を大好きになるということ
- ・ リズムがよいこと。授業開始のサーキットトレーニングをみても、Y先生は「早く、早く」と言っているが、決して強制はない。生徒たちが丁度よいリズムで行っている。あれが授業開始にできていたの大きかった。
- ・ Y教師の丁寧さ、生徒の見方が快適さを生徒に生んでいる。女子中学生は特に体育嫌いが多くなりがちなのに、見てる限りそれが見られない。
- ・ 柔道の体育の導入には、専門家の間から否定的な声があがっている。専門的な教師がいないところでの重大な事故の発生を懸念している。Y教師は、雑な動きを作らせていないのがすごい。
- ・ 女子なのに受け身が上手。寝技の課題に取り組んでいるときを見ても、ちゃんと受け身をしている。
- ・ 「どこがおかしかったt?」と言って、すぐに話し合いにはいつている。
- ・ 全教科における、言語活動ということが指導要領に導入されて、体育では言語活動＝話し合いと捉えた授業が日本全国多くなっている。これがいい結果を生んでいない。体育や音楽には、それぞれ特有の言語を持っている。体育では技の言語。それは話し合いではない。技を言葉で表現すること。それが体育で行うべき言葉である。
- ・ 武道＝技と型の学び。技は、1つ1つの型を生み出している。今日の授業では、「ひっく

り返す」「引き手と釣り手」そういう技の合理的なところを目にしたとき、子どもは感動の声をあげている。でも、生徒たち自身はというと、なかなかできていなかった。Y先生が、ヒントで「この技はね、柔道全体で共通しているよ」と出したとき、自分は「なるほど」と思った。あれは“はらい”だよね。押したりするんじゃなくて、“はらい”の感覚なわけ。子どもは力だけで、そこが見つけられなかった。

- ビデオ映像で「お～」とか拍手とか、感動がすごい



授業作りの点で

①教科の本質、本質的な学びが大切。体育でよくみる「目当て学習」「話し合い学習」あれはダメ。「技」と「型」の学習。技とは合理的な体の動かし方。例えば、バレーボールの授業。どうしてもアンダーハンドパスが多くなってしまふ。授業者が、バレーの基本の本質をとらえていないから。バレーの基本は、ボールの下に入るのが基本。技をもっとわかりやすく、シンプルにとらえさせる。

②課題を高くすると、できない子が夢中になっている。これが協同的な学びの凄さ。最近面白いことがわかった。協同的な学びを理解していない人が、よく協同的な学びの問題点として「間違っ意見が出ると、その意見に左右されるデメリットがある」と書いている。あれにはびっくりした。なぜかという、協同的な学びを実践している人はわかるとおもうけど、そういう風にならないから。そんな風になるとは考えたこともなかった。だから、逆にこ

こ考えることは価値があると思うわけ。なぜ考えなかったのか？

簡単に言うと

きき合い学級をベースにしている      話し合う学級をベースにしている

学びの共同体	一般の授業
聞きあう学級をベースに	話し合う学級をベースに

ダイアログコミュニケーション 意見の違いのジグザクを生かす方向に	モノローグコミュニケーション 意見の違いを生かさない方向に話す
-------------------------------------	------------------------------------

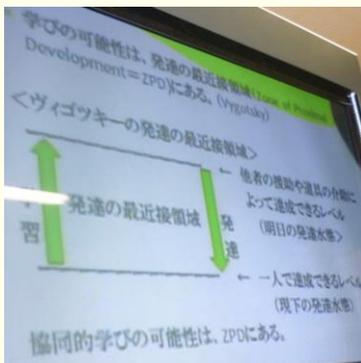
協同的な学びでは、できない子がいるから深まる。今日の授業では、技ができない子がいるから深まる。

③上海の教科書と、今の日本の教科書を比べると、だいたい4年くらい内容がずれている。カナダでも2年程度、内容レベルが高い国ほど、国際学力調査の結果で上位になっている。教科書の内容とレベルの高さが大切。日本の数学の教科書なんかは、はっきり〇〇社を採用した学校や地域の学力とそれ以外の学校の差が出ている。

特に、英語は、日本の教科書のレベルが低すぎる。内容も学びがない。だから、30分くらいで教科書を終わり、20分で教科書から離れて高い学びをしなくてはならない。そんな授業では、活動量が増えて、生徒たちの声が出て夢中になっていく。

④自力解決は、わかっていることをやるだけの活動である。だから、できる子は学ぼうとしないし、できない子は、白紙になる。1人では学びは成立しないから

ヴィゴツキー：学びは2段階・・・他者とのコミュニケーションで学ぶ段階があって、自分のものにする学び（心理的に内面）がある



⑤これまでの高校の特に底辺校の教室でよく見られた姿



ところが最近の高校の教室で見られだしてる姿。寝ている生徒はいない。丁寧にノートをとっている。理解ができないとすでに思っているから。



このような子どもを育ててはならない。

この姿をなくすには、「わかんねー」と言えること。わかんなかったら、ノートを前の授業のところにひっくり返すとか、教科書を開くとかするようになる姿に変えること。



今、学力が世界的に高くなった、上海の教室風景。

できない子は、なんと1%しかいない。驚き。これは、協同的な学びを取り入れていること

と、もうひとつある。それは、できない子を授業の中で、必ず活躍させることを徹底させていることだ。上海の教師の習慣にもなっている。

⑥グループや話し合いが目的になっている場合が多い。これは学びができない。考え方が逆で、学びは個の学びのために協同が必要なのである。

⑦学びは3つの姿

- ・ 学び=真似び・・・他者の思考を内化すること。モニタリングともいう。分からない子は他者とのかかわりの中で、他者の思考を真似ることで理解していく過程。



- ・ 足場かけ (架け橋) ブルナー

他者の思考を踏み台 (scaffold) にしてジャンプする学び。

わからない子が scaffold するには

いろんなアプローチを許される自由がある授業

友のつまずきを足場にしたときにおきる。これまでは、高い子の考えを足場にすると思われていた。しかし、つまずいている子の思考で足場ができることがわかった。

だからこそ、上述した、「わからない子の意見に左右される」という説は考えることもなかったわけである。デメリットと考えたことはなかった。



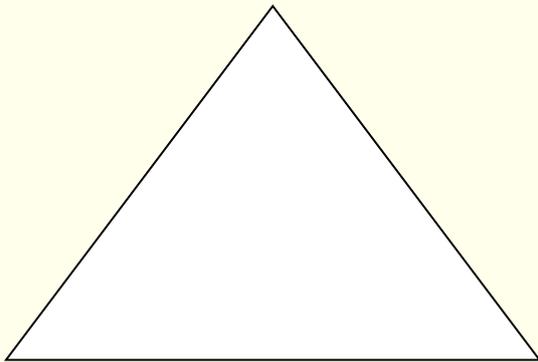
- ・ もうひとつある。互恵的な学び  
脆さを抱えているからこそつながる。

このグループには、英語ができない女子生徒と、英語はできるが場面緘黙の男子生徒がいた。この生徒が、互いの能力の足りなさをかばいあって、課題を乗り越えていった。とても感動的。最後は、この二人で発表までしている。まさに、これが互恵的な学び。グループでできない子がいたら、どうやって乗り越えさせようとするのか、そこを支えるのが教師。

最後に

- ・ 課題の質を高めなくてはならない。それには、本質を知らなくてはならない。今高校で大きな問題は、実は進学校。授業で3割は、内職している。3割は寝ている。学んでいるのは半分もいない。東大にいる学生から聞くと、日本のどこの進学校でもそれが起きているのがわかる。それでも、違う授業する教師はいるだろうと尋ねると、3人くらいいると答える。教師が100人いる学校で、3%。どういう教師かと聞くと、大学教授以上の知識をもっている教師。なるほどそのとおりだ。
- ・ 話し合う学びから聞きあう学びにするには、この三角形が大切

真正の学び（教材の本質を追求させる）



聞きあう関係

ジャンプのある学び

この3つがあれば、学びはうまくいく

真正の学びでいうと、

例えば小学校算数の少数は、10進法と1あたり量がわかることが大切

掛け算は、1あたりの量を徹底して教える。 $3 \times 5$ と $5 \times 3$ の違いを考えさせる学び

$5+7$ の繰り上がりから $13-5$ の繰り下がりを教えるのが教科書の流れ、でも、本質からいうと繰り下がりから教えたほうが、繰り上がりも理解できる。意味がわからないままになるとついていけない。繰り下がりを通して、意味を理解させることが真正の学び

#### 【参加との意見交換から】

田中さん：教師は子どもにどんなノートをとって欲しいかを考えなくてはならない。自分も、黒板の板書をきれいにノートさせてきていた。

川田さん：この研究会に参加して、最近から自分の学級で自力解決をやめた。ただ、グループ学習がまだ話し合い学習になっており、なかなか聞きあう関係になっていないのが悩み。

豊岡さん：自分も自力解決をしないで、すぐにグループ活動を取り入れている。

浅井さん：話し合いから聞きあいの学びに変えるには、課題のレベルの高さが問題になってくるだろう。

課題の質と高さについては、今年度の本研究会の中心的な話題になっています。

保科さんからは、講演のDVDと授業のDVDを出席者に配布していただきました。本当に素晴らしい授業と勉強会でした。ありがとうございました。

今年の本研究会は、これで終了です。来年は、1月26日（土）に開催予定です。どうぞ、予定を空けて置いて、また一緒に学び合いましょう。



[戻る](#)